

上野の杜の 波瀾 万丈

述懐される軍楽隊での活動

軍楽生徒は掃除、点呼、朝食の後、全天候型と称し、毎朝午前中は戸外で直立不動にて楽器を持ったまま精神訓話を聞き、楽器練習(高澤談)。しもやけの痕は今も(石津談)。午後は二時間の楽器練習に始まり、体操、学課、軍事訓練等。夕食後の十時までが自習で、四か月後には《軽騎兵序曲》《分列行進曲》などが吹けるまでになった(團筆)。

述懐される軍楽隊の日々——「陸軍では第一種兵器が銃と剣、第二種兵器が喇叭、第三種兵器が軍楽器とされており……兵器であり大元帥陛下から賜った神聖なものゆえ、わが命を捨てても守らねばならぬ」という楽器は「Made in U.S.A.」(芥川筆)。実際には米国製は例外で、軍楽隊生徒が用いる楽器の大部分は日本管楽器株式会社(ニッカン)製であった。「生徒の間は一年先輩にぶん殴られっぱなしで、自分や芥川のような背の高い者から順に殴られた。

第十一回

東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 後篇 橋本久美子

昭和十九年十月、陸軍戸山学校軍楽隊に入隊した東京音楽学校生十四名。戦後日本の音楽史を彩った音楽家たちが証言する戦時下の軍楽隊の日々。

それが卒業した途端に大事にされ、連日、東京千葉、山梨など各部隊の慰問や任官の宴会などに引つ張り回された。レコーディングもあり、出張で貰う大量の饅頭、砂糖、羊羹を土産に持ち帰った(石津談)。「演奏に行った先で酒樽の底を叩かされたこともある」(北爪談)。「譜面を書く仲間がパート譜を書いて、大編成で音を出してくれる。移調を間違えるとすごい響きになる。これが後で大変役に立とうとは」(斎藤筆)。

昭和二十年の陸軍記念日すなわち三月十日、前夜からの大空襲にもかかわらず、軍楽隊は例年通り靖国神社に参拝し、神田須田町↓日本橋↓銀座通り↓日比谷へと吹奏行進した。その戸山学校も四月十三日深夜から翌日未明の大空襲に見舞われ、懸命の消火活動にもかかわらず大方焼失し、軍楽生徒一名が焼夷弾の直撃を受け即死した。五月二十八日、十九年度生は焼け跡で卒業式を迎えた。首席で教育総監から銀時計を授与された芥川をはじめ、音校生は成績上位で卒業した。翌日、浅草橋の日本橋高女(現日本橋女学館)に移転する。

敗戦当日、教育総監部内で機密兵器の減去、機密書類・対米対ソ書類・人事関係書類の焼却、御真影と勅諭の奉焼等が決定される。八月十七日の本部では明日にも連合軍上陸とのデマが飛び交い、書類を焼く煙と無数の軍人軍属の怒鳴り声で騒然としていた(山口筆)。翌十八日には軍楽隊でも日本橋高女の校庭の焼却炉で重要書類や軍隊手帳を焼却し、校舎屋上で隊員たちが泣きながら見守る中、御真影を奉焼した(高澤談)。

戦中の東京音楽学校

では学徒出陣以降の音校はどうであったか。十八年十一月、仮卒業式で「元ヨリ明日ノ生命アルヲ頼マズ」と校長壮行の辞。十二月、第百一回定期演奏会。これにてしばし中断。

十九年一月、入学者選抜にあたっては徴兵年齢の低下に合わせ若年を優先的に合格させることのないよう文部省より通達。六月、除隊後に学年三分の二以上を経過していれば学年修了と文部省より通達。しかし終戦直後にこれ

が適用され学校生活を奪われたまま繰り上げ卒業となった方々の無念は痛切である。「再び学校に戻って勉強できるのを楽しみにしていたが、そのまま卒業となったのが今でも残念」(北爪談)。「何が何だか判らないうちに卒業させられてしまった」(團筆)。九月、卒業式の校長式辞は音楽にひと言も触れず「今や皇国存亡の危急」。十一月、東部七八五部隊が兵器被服等格納に学校建物を使用。「軍楽隊で休みをもらい、音校の様子を見に行ったら音もなく空き家のように異様な静けさだった」(沼田談)のはこれ以降か。二十年六月、東部第二部隊が分教場を、七月には運輸省本省が本校校舎を使用。学食「キャッスル」が宿直や軍関係者の食事を作ったと二代目主人の福本豊氏は語る。

音校の昭和十九年度概算要求は「甲種師範科年限延長と増募」を筆頭に、国防上防空と水中聴音に必要な「音感教育研究施設」、日本音楽による大東亜共栄圏内諸民族の指導に喫緊の「国民音楽文化研究所施設」を記し、年限延長を実現させた。時局と折り合いつつ存続と充実を図った音校の姿が浮かび上がってくる。

十四名の華々しい戦後

軍楽隊を経た十四名の戦後は――芥川也寸志
 Ⅱ管弦楽、映画音楽、CM作曲、うたごえ運動、
 新日本交響楽団結成、日本音楽著作権協会理事
 長。石津憲一Ⅱバリトン、愛知県立芸術大学名
 誉教授。伊藤榮一Ⅱ終戦翌年トロンボーン専攻
 で再入学。編曲、指揮。現役の合唱指揮者。東
 京学芸大学名誉教授。内田富美彌Ⅱトランペッ
 トのテクニクが抜群だったと高澤評。奥村一
 Ⅱピアノと吹奏楽を結びつけた作品で吹奏楽界
 に貢献。梶原完Ⅱピアニスト、本学助教を経てベッ
 ツドルフ(独)のアドルフ音楽院教授。北
 爪規世Ⅱ読売日本交響楽団のヴィオラ首席奏
 者。齋藤高順Ⅱ航空自衛隊航空中央音楽隊長、
 警視庁音楽隊長。代表作《ブルーインパルス》、
 小津映画「東京物語」。鈴木良一Ⅱ京都市立芸
 術大学で後進の指導。團伊玖磨Ⅱオペラ《夕鶴》
 《素戔嗚》、交響曲、歌曲、著作『パイプの煙』
 等。沼田元一Ⅱ北海道教育大学名誉教授。早川
 博二Ⅱ歌謡曲と吹奏楽等作曲、トランペット奏
 者、指揮者。萩原哲昌Ⅱ《スーダラ節》《いい湯
 だな》等クレージーキャッツのほとんどの曲を
 作編曲。藤島義勝Ⅱ都留文科大教授。
 軍楽隊の件は戦時下の東京音楽学校の一場面
 にすぎない。国策から生徒個人個人の経験に至
 るまで掘り起こしてはじめて、全体像の解明に
 近づくであろう。

(はしもと・くみこ／音楽学部講師)

注

1 前編で藤島氏の専攻がオーボエとあるのは軍楽生徒になつて
 からで、音校ではピアノです。お詫びして訂正します。

2 前編写真1のキャプション中、本校以外の音校生吹奏の件は、
 武蔵野音楽大学総務課と国立音楽大学校史編纂室の協力によ
 り、面校とも戦前には管楽器専攻生は在籍しないが、管弦楽演奏
 やブラスバンドの慰問演奏を行っていることが判明しています。



1. 音校の軍楽生徒も加わった昭和20年陸軍記念日(長田暁二『日本軍歌全集』音楽之友社 昭和51年)。地面が濡れているのは雨ではなく、大空襲時の消火活動で使われた大量の水が靖国神社の
 坂下を集まったため(高澤談)。同書掲載の写真は左右反転しており(谷村政次郎他指摘)、今回が本来の写真である



5



4



2
3

2. 裏庭に防空壕を掘る(昭和16年 畑中良輔名誉教授提供)
3. 女子生徒の執銃訓練(昭和16年 畑中良輔名誉教授提供)
4. 軍事教練 遭遇戦(昭和17年7月 軽井沢)
5. 奏楽堂に取り付けられた見張り台。宿直教員、甲種師範科生徒等が交替で敵機襲来を見張った

次号予告

「日本美術の保護」 吉田千鶴子

日本の古美術の破壊、散逸状況に敢然と挑み、
 全国調査、研究、保護制度づくり、学術的修理
 に大きく貢献した岡倉天心・東京美術学校の活
 動を振り返る。